

平成 26 年度

東北学院大学外部評価報告書

平成 27 (2015) 年 3 月

東北学院大学外部評価委員会

目 次

◇平成 26 年度東北学院大学外部評価委員会における活動及び報告書について	1
◇平成 26 年度東北学院大学外部評価結果	
Ⅰ 外部評価インタビュー調査 実施方法	4
Ⅱ インタビューから得られた知見	
1 卒業生	
（1）東北学院大学の <u>教育について</u> の要望、良い点、改善を要する点	5
（2）東北学院大学の <u>教育以外の事項について</u> の要望、良い点、改善を要する点	7
（3）東北学院大学の社会的評価の向上にむけた意見及び提案	8
（4）その他所見等	9
2 高等学校進路指導担当教諭・予備校講師	
（1）東北学院大学を「どう評価しているか」や「どう指導しているか」	10
（2）東北学院大学の「魅力的なところ」や「改善が望まれるところ」	13
（3）東北学院大学の社会的評価の向上にむけた意見及び提案	15
（4）その他所見等	17
Ⅲ 大学への意見及び提案	18
Ⅳ 総評	21
◇参考資料	
・平成 26 年度東北学院大学外部評価委員会 名簿	23
・東北学院大学外部評価委員会規程	24
・第 2 期東北学院大学外部評価 概要	26
・平成 26 年度東北学院大学外部評価 インタビュー調査 実施要領	27
・平成 26 年度東北学院大学外部評価 インタビュー調査 タイムスケジュール	29
・平成 26 年度東北学院大学外部評価委員会 議事録（第 1 回、第 2 回）	31

平成 26 年度東北学院大学外部評価委員会における活動及び報告書について

平成 27 年 3 月 20 日
東北学院大学外部評価委員会

1 東北学院大学外部評価委員会

東北学院大学外部評価委員会（以下、「本委員会」という。）は、東北学院大学外部評価委員会規程」に基づき、東北学院大学に設置された委員会である。本委員会は、学外の第三者による外部評価を実施する委員会であり、評価を通じて、同大学の教育・研究水準の向上及び組織の活性化に資する提言を行うことを目的としている。

今年度は、平成 25 年度に発足した第 2 期外部評価（委員長：遠藤恵子元山形県立米沢女子短期大学学長、任期：平成 25～27 年度）の 2 年目にあたる。構成員は、下記のとおりである。

- 委員長：遠藤 恵子（元山形県立米沢女子短期大学学長）
- 副委員長：加藤 義雄（元仙台市副市長）
- 委員：坂田 隆（石巻専修大学学長）
- 委員：関内 隆（東北大学 高度教養教育・学生支援機構 教授
高等教育開発部門長 教育評価分析センター長）
- 委員：菅原 裕典（株式会社清月記社長）
- 委員：菊地 健次郎（多賀城市市長）
- 委員：須藤 亨（元宮城県仙台南高等学校校長）

2 活動及び評価の方法

本委員会は、「東北学院大学外部評価委員会規程」に基づき、平成 26 年度に外部評価を実施した。

第 2 期外部評価では、第 1 期外部評価委員会からの引き継ぎを受け、その主たる評価方法を在学生や卒業生などに対するインタビューの実施とした。1 年目となる平成 25 年度は、当該年度在学中の全学部の 3 年生、並びに、卒業後 5 年程度の卒業生を対象としたインタビュー調査を実施するとともに、在生学生については、事前に教育・学生生活等に関するアンケート調査をあわせて実施した。インタビュー及びアンケートの結果からは、ゼミ教員の熱心な教育やサークル活動など、学生生活は充実しているという評価が得られた一方、自身の将来を見つめたり、社会に出てから役立つ力を養う取り組みが弱いなど、キャリア教育や大学教育の厳しさが不足していることが見出された。教育環境、広報、就職支援への不満・物足りなさなど、改善が必要な点も見出された。

これを受け、平成 26 年度は改善・改革に取り組むべき事柄をより明確にすべく、卒業生に加え、在校生にかえて高校教員・予備校関係者のインタビューを実施することとした。

なお、在校生へのアンケート及びインタビューは、学内の別の仕組みにおいて既に実施され活用に向けて取り組まれていることから、今年度は実施しないこととした。

日付	内容
平成 26(2014)年 9月 1日 (月)	第 1 回外部評価委員会開催
平成 26(2014)年 9月～ 11月中旬	外部評価委員長、点検・評価委員長及び事務局での打ち合わせ並びにインタビュー対象者選出
平成 26(2014)年 11月 29日 (土) 12月 1日 (月)、6日 (土)、 8日 (月)、10日 (土)	インタビュー調査 卒業生 2 回、高校教員・予備校関係者 4 回
平成 27(2015)年 1月～ 2月	『平成 26 年度東北学院大学外部評価報告書』編集
平成 27(2015)年 3月	第 3 回外部評価委員会開催 『平成 26 年度東北学院大学外部評価報告書』を大学に提出

3 本報告書の構成

本報告書は、以下の 4 部で構成されている。

「Ⅰ 外部評価インタビュー調査 実施方法」では、インタビュー対象者及び実施内容について報告する。

「Ⅱ インタビューから得られた知見」では、インタビュー調査終了後に各委員が作成した「インタビュー調査に係る報告記入シート」の意見等を取りまとめた内容を報告する。

「Ⅲ 大学への意見及び提案」では、Ⅱの内容を踏まえた上で、本委員会から貴大学に対する提案を示す。

「Ⅳ 総評」では、本年度の外部評価方法について考察した結果を報告する。

貴大学には、本報告書を学内外へ広く公表すると同時に、今後の教育の改善、社会貢献の取り組みにおいて大いに活用されることを切望する。

平成 26 年度
東北学院大学外部評価結果

I 外部評価インタビュー調査 実施方法

1 調査内容の検討

委員会及び事務局との話し合いの上、昨年度実施形態の改善も踏まえたインタビュー実施要領を策定した。以下は、その概要である。

2 調査対象者

- ①卒業生
- ②高校教員（進路指導担当者）
- ③予備校関係者

3 実施概要

- ①卒業生は、議論の活性化を図るためグループ形式とした4名と5名の2グループを構成した。
- ②高校教員も予備校関係者と組み合わせてのグループ形式とし、4グループを構成した。
- ③インタビュアーは外部評価委員が務め、各グループ2名程度とした。
- ④インタビュー調査の時間は十分に意見交換が発展するよう1時間半～2時間とした。

4 インタビュー内容

卒業生、高等学校進路指導担当教諭・予備校関係者それぞれについて、下記①～③を中心とし、自由に質問することとした。

- ・卒業生
 - ①東北学院大学の教育についての要望、良い点、改善を要する点
 - ②東北学院大学の教育以外の事項についての要望、良い点、改善を要する点
 - ③東北学院大学の社会的評価の向上にむけた意見・提案
- ・高等学校進路指導担当教諭・予備校講師
 - ①東北学院大学を「どう評価しているか」、進路先として「どう指導しているか」
 - ②東北学院大学の「魅力なところ」や「改善が望まれるところ」
 - ③東北学院大学の社会的評価の向上にむけた意見・提案

Ⅱ インタビュー調査から得られた知見

1 卒業生

(1) 東北学院大学の教育についての要望、良い点、改善を要する点

1) 授業等の教育活動に関する意見

良い点として、入学直後のオリエンテーション及び専門科目の授業、ゼミナールにおける研究、教員の指導に対しては高い評価が聞かれた。

その中でも、オリエンテーションにおける引率先輩（オリエンテーション・リーダー）の対応については、大変好評であった。丁寧な接し方に新入生も安心し、大学生活のスタートを切る際に大変心強かったとのことである。

授業に対する満足度については、学科や対象者によって異なる。「入学して好きな勉強や研究を自由に行うことができ、大変恵まれた環境であった」、「授業を実際に受けてみて、期待通りの内容だった」という意見があった。その一方、「1～2年次の開講授業に専門分野の科目が少なく不満を持ったものの、学年進行に伴って専門科目が充実し、満足度も高まっていった」という意見もあり、学科によっては低学年における専門科目の充実に関する検討が必要であろう。

ゼミナールについては、真剣に取り組む雰囲気と意識の高さに後押しされ、研究に取り組む意欲も高まったという意見があった。担当教員の存在も、総合的な評価の大部分を占めており、甘えを許さない熱心な指導が「東北学院大に来てよかった」という評価につながっている。

以上のことから、貴大学においては、教員による研究を基礎とした優れた授業やゼミナール、卒業論文を中心に満足度の高い教育が提供されていることが分かり、評価に値する。

改善を要する点として、①教育内容の質とレベルに関する点、②学生の意欲・能力向上に関する点、③社会人基礎力を養う機会に関する点、について意見が述べられた。

①については、一様に物足りなさを感じているようである。具体的には、講義や試験が簡単な科目が多く、大学教育の厳しさが不十分であると感じており、意欲を持って入学した学生を満足させられていない状況にあるようである。

また、②については、経済学部でのゼミナール選考で希望のゼミナールを受けることができず、履修が叶わない学生がいた例が取上げられ、大学での学びにおいて大きな役割を持つゼミナールや卒業論文を、希望者全員が履修できるようにしてほしいという要望が挙げられた。卒業論文について、一部の学部で選択科目となっていることに対し、「論文を書かなければ何のために大学に来たのかわからない」、「誰もが経験するよう必修化すべき」という意見は、学生自身が「高みを目指す」ことを望んでいる表れであり、そのための仕組みの再考が不可欠である。学生が求める教育の提供は大学の本質に関わることから、授業評価等を参考に教育の方法・カリキュラムの改善を継続的に行っていただきたい。

加えて、学内のアカデミックな雰囲気の醸成も求められている。卒業生からは、東北学院大学の学生の特徴を「受身であり、周りに合わせるのがうまい人が多い一方、自分を

主張する人が少ない」としている。授業中うるさくする、真面目に受けていないなど、意識の低い学生を不愉快に感じることもあったとのことから、周りの学生も含めた学内の雰囲気、学生の勉学意欲に与える影響は大きい。

さらに③について、正課外の支援制度として留学制度の充実も求める声があった。インタビュー調査の中では「フランス留学を希望したものの、在学中に提携校がなく断念した」というケースも紹介された。留学を含め、学生時代に学外での活動経験を望むケースは、今後の高等教育においても非常に重要な位置づけとなると予想されていることから、今後は提携校の拡大も含め、留学支援をはじめとした学外学修プログラムの強化を図り、多くの学生がそれぞれの夢を実現できるよう改善が望まれる。

2) 授業環境、各教員への改善要望

授業運営、環境に関する改善要望が多く挙げられた。複数の授業において、満席で通路に座る状況が発生していたようである。昨年度も同じ内容の回答があったことから、恒常化したこれらの状態の解消が急がれる。その他、「教室内での私語や携帯電話の操作など、講義に集中しない学生がいる場合には、注意して欲しい」との希望もあった。教員がしっかり管理しながら、教室全体でモラルを守り、集中する雰囲気を作っていくことが求められている。

提供される教育の質や教員の姿勢については、毎年同じ試験問題の出題、頻繁に休講する教員に対する不満が紹介された。「指定教科書を購入したが使用されなかった」、「課外活動の公認欠席の扱いについて、教員間で対応が異なっており、統一の必要がある」などのケースも紹介され、学生の戸惑いや不満を生むような状況は、速やかな是正が必要である。

(2) 東北学院大学の教育以外の事項についての要望、良い点、改善を要する点

1) 大学全体の制度や体制等への改善要望

学生に対する情報発信については、一部で不十分なケースが見られたとの意見があった。就職関係の説明会やセミナー等の告知・周知が十分に行き渡っていない状況が見受けられた。学生が求める情報であるからこそ、より多くの学生に伝わるよう、広報や周知の方法を工夫する必要がある。

教学部門の窓口対応については、その対応に個人差があるという意見があった。教学系の窓口で嫌な対応をされたエピソードや、質問をしても「わかるでしょ」といった突き放し方をされたなど、複数の調査対象者が不愉快に感じる対応を経験している。

一方で、親切かつ丁寧に対応する職員や、親身に協力してくれた職員もいたとのことから、対応の差が際立つものになったと予想される。

2) 課外活動などを含めた大学生活に関する意見

課外活動など、正課カリキュラム以外の活動を経験した調査対象者は、充実した学生生活を送った傾向が見られた。それらの経験が、社会人となった後においても、実感をもって様々なかたちで活かされているようである。学生会常任委員会を経験した卒業生からは、学生課職員に親しく接してもらったこと、特に学生の自治や自主性を認めてもらったことへの感謝が語られた。またある卒業生は、部活動を「小社会」と表現しながら自分自身の成長を振り返っていた。諸先輩から言葉遣い・マナーを教わり、大学外の一般社会と接することも多く、それらを通して学んだ人間関係の対処方法等は、就職後の電話応対等の業務において役立った、とのことである。

寄宿舍を利用した卒業生からは、恵まれた環境で生活できて良かったものの、1年間で退舎しなければならず、その際にアパートの斡旋などをして欲しかった、という感想が述べられた。

(3) 東北学院大学の社会的評価の向上にむけた意見及び提案

貴大学のネームバリューやその影響については、就職後によりやく実感されるようである。一般に、「東北学院大卒業」というと評判が良く、隣県では友人の間で胸を張れるとのことであった。仕事の関係で東北学院OBと出会い、仕事が円滑に進む様子に、大学の規模と社会からの評価を感じとっている。これを踏まえ、複数の調査対象者が東北学院大学の強みを「人」と言い切った。

一方で、知名度と就職率以外の明確な「強み」がインタビュー調査では伝わってはこず、また「強み」があったとしてもそれを発信できていない貴大学の状況に対する危惧を口にしていた。「この勉強をするなら東北学院大学」という何かしらの強みや目新しい取り組みが聞こえてこないことに加えて、「英語に強い東北学院大学」というイメージの衰退、シンボリックであった学科名称の消滅、法科大学院の募集停止などの近況から、母校の勢いが失われているような印象を受けている。

さらに、卒業生自身が東北学院大学の学生の気質について語るとき、自分にも身をおきながら「自己主張せず、流されやすい」、「積極性、行動力に欠け、受け身で応用が利かない」と客観的に評価した。

卒業生らは、このような状況の背景として、貴大学が自らの魅力に気づいていないと指摘している。そして、大学の社会的評価を向上させるための前提として、「まず教職員一人ひとりが強みを認識し、営業という立場で強みを広報するよう取り組む姿勢を持つこと」が提案された。この意見を素直に受け止めれば、自大学の魅力を教職員全員で共有するとともに、心に刻みつつ、日々の業務を遂行していく必要があるだろう。貴大学の強みが広く伝わっていけば、社会的評価の高まりとともに良い学生、良い先生が集まってくるであろう。

次に、様々な学力の学生が入学してくる中で、教員は講義内容、方法を低い学生に合わせるのではなく、講義の質やレベルを高め、学生の意欲・能力を引き上げて欲しい、という意見が出された。加えて、大学において、学生の積極性や行動力、社会性を身につける機会の提供及び強化が提案された。具体的には、様々な立場の人とのコミュニケーションや電話対応など、社会で必要とされる能力及び知識は、在学中に経験できると良かった、ということである。学外に出る経験（ボランティア、インターンシップ）は学生に自信を与え、課題に取り組む力も高めることから、学生の行動を起こすきっかけを大学が提供して欲しい、との要望が出された。

大学の魅力を高める方策としては、「東北学院大学でなければできないこと」に力を注ぐことが挙げられた。特に強みである「人」、つまり同窓生による在校生の育成協力が考えられる。具体的には、講演会講師、課外活動の指導など、多様なかたちで関わる機会を生み出していくことが提案された。

また、研究活動において理解しやすい研究成果があると、報道されることにより高校生の関心と興味を惹き、進路選択の際の大きな魅力となるので、ぜひ生み出して欲しいとの期待が述べられた。

地域に根差した大学としての強みをどのように活用するか、という項目に対しては、「出前授業を積極的に行って欲しい」、「地域の商店街と町おこしのイベント支援や地元

企業との連携」するなど、大学みずから身を乗り出して取り組むことが要望された。

他県出身者からの「他県に高校を設置し、中等教育から育てて欲しい」という提案もユニークである。東北地方の他県では学力があっても経済的に大学に行けない子供たちもいることから（秋田県の子供は学力日本一）、附属・併設学校を作り、授業料免除での進学援助を要望するものであった。優秀な学生獲得の一方法として参考にしたい提案である。

（４）その他所見等

インタビューの中で垣間見た貴大生のおおらかさと逞しさについて紹介しておきたい。事務職員の窓口対応について質問したところ、「対応に問題のある事務職員が一部にいたとしても、その人が窓口にいないときに別の人に相談すればすべて解決」と、平然と答えた学生がおり、参加者すべてが笑顔で同調する一幕があった。日常のキャンパス生活の中で、こうして社会人基礎力をつけ、着実に成長していく学生の姿が印象に残った。

2 高等学校進路指導担当教諭・予備校関係者

(1) 東北学院大学をどう評価しているか、進路先としてどう指導しているか

進学先の選択肢として貴大学を見たときにどう評価しているかは、第一志望者としている生徒が多い高校と第二志望以下としている生徒が多い高校では、異なる回答であった。前者からは厳しい評価がなされなかったものの、学生の学力レベルの低下と教育に対する印象の薄さが一様に指摘された。

1) 東北学院大学の印象

貴大学のイメージは、「伝統と東北地方に広く根を張る卒業生に支えられた、東北地方で飛び抜けた存在感のある大学」というものであった。全体的には真面目で、特に文系学部においては東北で飛び抜けた存在感を持つ反面、オーソドックスで保守的なイメージが強いようである。また、地元で就職を望み、力を発揮することを目指す東北地区の高校生にとって、入学を志望する大学として位置づけられているようである。

そのような状況から、高校の進路指導教員は、地元での就職を望み地元から出ることのできない（あるいは出ようとしない）高校生に対して、OB・OGが多く存在する貴大学を強く勧めている、という回答であった。

一方、貴大学内でどのような教育をしているのかについては、学外から見た場合、突出した特徴がないように見えるために、教員も責任をもって勧めることができていない、といった悩みが紹介された。この状況は、生徒達も同様であり、そのためか第一志望とする生徒が減ってきている傾向にあると話されていた。特に、工学部でその傾向が顕著に見られるようである。

また、浪人生は国公立大学を第一志望にしているほか、保護者も子供が本当にやりたい学問領域がある大学ならば、県外の国公立や私立大学であったとしても行くよう勧める傾向にあるようである。その場合、貴大学は失敗したときの滑り止め、次善の大学と位置づけている。

以上のように、高校生も教員も東北学院大学を特色ある傑出した大学とは評価していない。

2) 受験生の近年の傾向と大学の教育内容

各予備校の分析によると、近年の受験生は大学で何を学べるかを事前に自分で調べ、求める教育・研究内容に合った大学を選ぶ傾向が強まっているようである。そのような状況において、「売り」となるような研究テーマがあると、高校生もその大学に興味を持つ。

さらに、近年は理系、医療看護系に対する興味・関心が強く、それらの学科を持つ大学に受験生が集中している。資格取得と就職の強さに対する関心は、依然として受験生・保護者ともに大変高い。その結果、資格取得が可能な学部学科を持つ大学に受験生が集中してしまう。また、進学先の選択には、保護者の意向も強く関わってくる。3～4割の保護者は地元から通学することを希望しており、子供の学力で入れる大学のうち、就職に有利な大学に人気が集まる。保護者会等を開催する大学もあり、就職ガイダンスやインターン

シップの実施が関心事となっている。

この傾向を踏まえて東北学院大学の状況を見てみると、第一志望として受験する生徒と国公立大学の滑り止めとして受験する生徒等のタイプに分けられるが、隣県の国立大学と東北学院大学の両方に合格し、最終的に貴大学を選んで入学するケースもまれにみられる。このように、貴大学は滑り止めとされており、浪人してまで選択はしない状況である。また、昨今、理系の人気上昇しているという現状であるにも関わらず、工学部には倍率の低い学科もあり、入りやすいというイメージのようである。なお、文系学部のうち、特に教養学部と法学部には、簡単には入れない大学というイメージが残っている。

3) 大学の教育について

貴大学の一部の学部学科編制や教育カリキュラムについて、魅力的と捉えている受験生がおり、合格した場合、他県国立大学や首都圏の大学からの誘いを断って入学する生徒もいるとのことである。特に、文学部総合人文学科、経営学部、教養学部言語文化学科や地域構想学科などは、その名称と教育内容が受験生にとって魅力的であり、入学希望が強い傾向にあるということであった。

なお、全体的に貴大学が選択されなくなってきた要因として「東北学院大学は卒業時に何ができるようになるかが見えない」、「どのような人材を育てようとしているのか見えない」ことが挙げられ、他大学と比較した広報面での弱さが指摘された。パンフレット等も同様である。宮城県内では、英語の勉強や国際系学部への進学を希望する高校生が多いことから、複数大学のパンフレットについて留学制度を見てみると、貴大学の大学案内等で割いているページ数と情報量の少なさが目に付く。他大学が同内容に力を入れていると、より貴大学の留学への力の入れ具合が伝わってこない。公開講座のパンフレットも、記載内容だけでは高校生が興味を持つような講座は見当たらないようである。

以上のことから、受験生からは、大学の魅力を紹介しようとする姿勢が薄いと受け止められてしまっているようである。また、具体的な教育内容の情報が少ないことで、高校教員が進路指導を行う上で苦慮しているということである。

4) 高大連携におけるアカデミック・インターンシップの意義

インタビュー調査において、仙台向山高校が実施しているプログラムが他校と比して特徴があるという話題が挙げられたため、それを紹介する。

同高校では2年生を対象に「アカデミック・インターンシップ」を3日間程度実施している。この企画は、高校生に「大学での学び」に直接触れさせることで、大学受験や定期考査のための勉強ではなく、大学での学びを支えるための勉強という意識を高校生にもたせている。学習面での高大連携を充実させるために有意義な取り組みであり、既に協力を得ている貴大学においてもさらに積極的に協力して欲しい、という希望があるようである。

これらの取り組みに関連して、他校の教員からも、オープンキャンパスや出前授業も意義はあるが、表面的で一過性のもの、あるいは一方通行的なイベントになりがちだという意見があり、3日間の「大学での就学体験」で大学の講義、演習、フィールドワークなどに直に接することは高校生にとって大きなインパクトになるようである。高校側は、高校

生に学問や教養を極める際に必要となる覚悟の気持ちを身につけさせることを目的として実施しており、この達成には、大学等の高等教育機関の積極的な協力が不可欠である。そして、この取組みは前述した「東北学院大学の中身が見えづらい」という問題を同時に解消するという面でも、貴大学にとって大きな意味がある。

5) 大学入試制度と入学前教育について

大学入試制度については、選抜方法そのものと、AO入試・推薦入試合格者の勉学意欲について、その維持に対する工夫を中心に意見交換がなされた。

AO入試については、貴大学が提出を求めている「第一次選抜審査申請書」は高校側から高い評価を得ていることがわかった。当該申請書の作成にあたって、受験生はかなりの時間と労力をかけて真剣に取り組んでおり、大学入学後の自分自身の在り方をじっくりと考えるよい機会となっているようである。なお、AOや推薦入試の枠をさらに増やすことに対しては、高校側からは否定的な考えが多かった。

また、入学生に入試方法の効果と問題点に関する追跡調査を行い、その改善方策を探ることも必要ではないか、という提案が出された。高校の中には、推薦入試と一般入試受験生の学力が逆転する現象が生じている学校があるという話題が挙がった。この場合、前者の勉学意欲が入学まで継続されず、入学後の成績不振や進級不可につながるケースも見受けられるようである。これを改善する方法として、例えば、AO入試、推薦入試ともに合格発表後の数か月間に、学びの意欲を持ち続けさせる入学前教育としてスクーリング等を取り入れるなど、積極的なフォローを行って合格者がスムーズに入学後の勉学に入れるような配慮をして欲しい、という要望が出された。

(2) 東北学院大学の教育について、魅力的なところ・改善が望まれるところ

魅力的なところとして、全体的に「伝統ある私立総合大学としての魅力があり、特に東北地区では就職に強い」という意見が挙げられた。特に、貴大学の教養教育を高く評価する意見が多く、また、実学志向や資格重視の単科大学とは違う魅力を持ち、専攻した専門分野とともに幅広い教養と視野の広さをしっかり身に付けることができる大学であると捉えているようである。在学している学生の話からも、指導教官を中心として在学生の指導を熱心にしっかりと行っている印象を受けているようである。

また、目標を見つけたときの潜在的な実行力を有し、周囲と協力して実現していく能力を持つ学生・卒業生が多いという特長もあげられた。これは、今年の卒業生及び在学生会へのインタビューからも感じることができた。

一方、改善が望まれるところとして、全体的な広報力の弱さが指摘された。大学の知名度は高いものの、実際に大学が行っている取組み、具体的な教育内容といった「強み」がわかりにくく、進路指導等の相談を行う際に迷いが生じてしまうとのことであった。これは、他大学と比較された際には大きなデメリットになっている。

この課題の原因として、貴大学の構成員自身が「強み」認識しておらず、学内でも共有されていないため、広報の手法や姿勢に反映されていないのではないかと、という指摘が卒業生からも聞かれた。あらためて、貴大学の「強み」の再発見に努めた上で、学内で共有し、社会への広報活動に反映させていく必要がある。

教育組織と教育内容については、明確なコンセプトが必要であるという意見があった。進路選択の際に、受験生は学部の教育内容まで調べ上げることから、学部学科の名称に独自性があっても、その教育内容は他大学でも学べるものであることがわかってしまう。高校教員が「この方面の研究が行え、かつ、県内の大学であるため、是非進学してはどうか」と生徒に勧められるようになることが望ましい。

また、入学してくる生徒の多様化に対応すべく低学年からの一貫した体系的なキャリア教育を充実させ、意欲的に学問に向き合い、資格取得も視野に意欲的に講義に臨む生徒を育成する必要もあるだろう。加えて、最近、就職活動が解禁となる日程が変更されたが、これに対応できる就職キャリア支援体制と、4年次7月までの勉学・研究を両立することができるような全学的・体系的な指導体制を構築していくこと、さらに、地域連携も取り入れた教育方法の改善も重要であるという意見が出された。

入学してくる学生の質と学力については、上位層と下位層でその幅がかなり大きいという印象を持っているようである。しかし、社会的には、貴大学のレベルが低下しているというイメージが確実に浸透しつつある。教育の質とレベルを保つためには、「トップクラスの学生をどう育てていくか」というビジョンを明確に示し、それを実現するための体系的な教育プログラムを提供していくことが必要である。

大学入学後に高校を訪ねてきた学生が大学生活の様子を語る時、勉学に向かう気構えがほとんどない学生が一部であるが存在し、勉学に励もうとする雰囲気は損ねていると感じている様子がうかがえる。今年の調査でも同様の不満や失望を感じる卒業生がいたことから、常態化していることが危惧される。インタビュー調査の中では、それら学力及び

勉強意欲の低い学生について、4年という間にどう教育していくのかを考えたとき、学力の底上げが不可避である、と述べられた。そして、その対策として、初年次教育やリメディアル教育の推進が提案された。意欲のある学生が満足できるよう、大学の提供する教育のレベルを高め、継続して勉強意欲を保てるような雰囲気づくりが求められているのだろう。

また、高校側に対する説明会のあり方についても、高校教員の要望を取り入れる必要があるという意見が述べられた。現在は、仙台会場であってもホテルを会場に実施されているが、ぜひ、仙台会場をはじめ、来学できる進路指導教員に対しては、大学を会場に、教室・図書館・各種実習室・情報教育演習室など大学の充実した設備を見学させて欲しい、との意向を持っているようである。貴大学を志望校とする受験生に対して大学での勉強をイメージさせる際、実際に施設設備を見た上での指導は説得力が増す、との意見であろう。

(3) 東北学院大学について、社会的評価の向上に向けた意見及び提案

この項目については、前項の「改善すべき点」で挙げられた意見及び提案に対して、実現できるところから具体化していくことが最善の方策ではないか、との意見が出されている。つまり、貴大学が教育・研究・社会貢献における絶え間ない改善に主眼を置き、その都度、多くの情報を発信していくこと、これに尽きるということであろう。伝統と就職のみを強調するのではなく、むしろ大学教育の内容の良さを学部学科ごとに、もっと前面に掲げた広報活動に時間をかけることで、結果として、最も効果的に社会的評価の向上となると考えているようである。

1) 大学の教育・研究について

学長が内外の厳しい批判の中で、貴大学の特徴を数点に絞り、その特徴の質を担保するシステムを構築し、広報活動していくことが提案された。

まずは、「トップクラスの学生をどのように育て、どうなって欲しいのか」というビジョンの明確化と、それを実現するための教育の強化が必要であるという意見である。具体的には、下がり続ける学力と教育の質の低下を食い止めるためには、学生を育てる目線と到達点を高くしなければならない。また、卒業生の進路においても「世界に出て行ける人材」、「上場企業に就職できる人材を育てる」など貴大学の設定する目標を置かなければ、意欲的な学生を集めることはできない。一方、学生に対する教育とともに、各教員の研究分野のレベルを上げていく流れを作り、周囲の目を留めるような魅力を創っていくシステムも合わせて持てることが望ましく、学生の興味・関心を高め、メディアにも登場する教員が多くなると良いだろう、ということであった。

しかし、就職のための勉強するのではなく、しっかりと専門を極めることができ、その結果、就職もできるという大学こそが地元では強い。社会的評価の高まりが広まり、その情報が高校にもフィードバックされ、結果的に受験生から選ばれる大学になる。この流れを作るためにも、高大連携、初年次教育、リメディアル教育、低学年からのキャリア教育という順次的な取組みが不可避である。また、近年の実学志向も事実であるものの、同時に地元志向も強まっており、貴大学への期待として、社会に出てから実際に発揮される広い視野に基づく応用力や、その教養的基盤を育成する大学としての価値を一層高め、地域に根差した教育活動も充実していく必要性が述べられていた。

これらの改革を実現するためには、まず、数値目標を設定し、達成にこだわることを避けられなくなるであろう。例えば、学部間で就職等の具体的な数値目標を定め、そのためにどうしたらよいかを考えると、一人ひとりの学生を見なければならなくなる。それに向けた方策として、どのように一人ひとりが社会人基礎力を身に付けることができるのかを考えなければならない。これらを考えていくと、「簡単に進級させない」、「卒業させない」という姿勢は、「本物の大学」という理解につながり、一時的に評判が下がる可能性があるものの、そのリスクを負うだけの意味が出てくる。

2) 取り組みを進める姿勢及び体制について

インタビュー調査における意見から、貴大学は改革に取り組むにあたり、将来の社会

を担う高等教育機関という観点から見ても、時代の変化に対する対応のスピードが他大学に比べ、ゆっくりであるというイメージを持たれている。この状況は、貴大学の意思決定において、トップダウンはなく、保守的かつ合意を得るまでに時間がかかるというイメージにもつながりかねない。これらは、教育の質・レベルとともに受験生の志望校選択、高校教員の進路指導、社会的評価にも大きな影響を及ぼすことになる可能性をはらんでいるため、生き残りをかけて取り組みに力を入れている他大学の危機感とその対応のスピードを参考とすると良いだろう。例えば、法人化後の国公立大学の危機感はその対応策への取り組みによく表れており、また、予備校への情報収集も熱心である。さらに、大学の広報活動は「発信する」段階から「工夫する」段階に進んでおり、身を乗り出して広報活動を行っている大学との対比で、貴大学の目立たなさが一層強調されてしまっている。なお、取り組みにおける事務組織及び職員の役割も重要となっており、私立大学のうち、改革が成功している大学は事務組織・職員に大きな権限が与えられている。

入試・広報担当部署での情報収集・広報活動について、所在地域外にも積極的に出向いている大学は増加しており、貴大学の勢いの無さがより強調されてしまっている印象を持たれている。予備校に対する各大学の働きかけの例を挙げると、入試時期に予備校を試験会場として借用する際に、大学の広報活動をするところがあるそうである。その広報活動の内容も単純な入試制度紹介にとどまらず、大学教員であれば自らの研究内容を、就職支援部門の職員であれば学内の支援制度などを、それぞれ紹介していく。そのような大学は、出身高校及び予備校から入学した学生の情報を必ず戻しており、高校教員のように驚くほど一人ひとりを良く見ていることがわかる。関西のトップ大学がそれほど身を乗り出し、覚悟を持って東北の地にやってくることを意識する必要がある。

3) 学部改組・新設の提案について

受験生の募集において、関心の高い分野を学ぶことのできる学部・学科の新設も戦略の一つとして提案された。

県内において農学・理学系の学部・学科を持つのは東北大学のみである。それらの研究・教育を貴大学で提供することで、バイオサイエンスを研究してみたいが学力的に東北大学には及ばない、という高校生の受け皿となる。また、既存の学部・学科をベースに新たな境界領域を研究する分野や研究室の設置など、可能なところからはじめることで、第一志望とする生徒の増加にもつながることが期待できるという話もあった。例えば、工学部において、工学をベースとして農学・バイオサイエンスの境界領域を扱う研究室を設置するといった方法でスタートする方法もあるのではないか。

4) 社会からの要望への対応、姿勢について

前述したとおり、貴学は、時代の変化に対する対応のスピードが、他大学に比べゆっくりであるイメージを持たれているようである。

現在、大学による地域貢献・社会貢献の推進が一層求められており、その一貫として各大学は地域社会からの要望に対し、特色のある取り組みを実施している。例えば、東北大学では、小学校の求めに応じて教員とサイエンスエンジェルに代表されるような在学生を派遣する取り組みを実施しており、学内の教員にも、「専門性を背景とした小学生からの社

会教育に積極的に関わってほしい」という姿勢が共有されている。学外に対する取組みは、報道機関の注目も集めることとなり、NHKや河北新報でその様子が紹介されるたび、大学の持つ魅力が外へと伝わっていく。高校レベルより専門性が少し高いことを生徒に伝えたいと考え、相談したときに素早く対応し、教員とTA（ティーチング・アシスタント＝院生・学生）を派遣する大学または学部・学科は、評価が確実に高まる。学生による自主的活動の姿を見せることも効果的である。山形大学では法学部の学生が模擬裁判のPRを行っている。

なお、このことを貴大学に置きかえたときに、中学校や高校から要望した場合にそれに対応してくれるというイメージは他大学と比較すると弱いという印象のようである。例えば、「以前、施設借用について相談したところ、さまざまな理由をもとに『難しい』と言われた」など、外部に対し「対応してもらえない大学」という印象を与えているケースも見られる。今後、学外からの相談や要望に応える姿勢を示す必要性がより一層増していくと考えられることから、対応体制を充実させて「社会の要望に応じてくれる大学」を目指すべきであろう。

（４）その他所見等

貴大学がキリスト教の大学であることについては、意識して進学する高校生はほとんどいないということが、インタビュー調査の中で示された。地域の拠点として長い歴史を有する総合大学であるものの、現状では、建学の精神が意識されていないといえるであろう。

学費に関しても、受験生・保証人にとって一番の障壁にはなっていないようである。大学を選択する際の最も重要な要件は、授業や入学後の満足度であり、奨学金制度だけのPRにそれほど効果はない、という意見があった。

印象に残るニュースとしては、キャンパス統合が挙げられ、このことは概ね好評である。

最後に、どの調査対象者からも「関東の大学に行かずとも、東北学院大学を出れば世界に出られる、上場企業に行けるような大学になって欲しい」、「東北の他県で国立大学には行けない子が志望し、宮城県の学生が入れなくなるくらいにして欲しい」、「東北の拠点校になって欲しい」といった、東北学院に対する熱い期待が語られていた。

Ⅲ 大学への意見及び提案

「Ⅱ インタビューから得られた知見」の内容を踏まえ、本委員会より提案を行う。

大学の中身に関して、卒業生からは学内の様子を、高校教員・予備校関係者からは外からの視点で生きた声を聞くことができた。それらの意見をしっかり検討し、貴大学の課題となるものについて、迅速かつ真摯に解決に取り組み、要望・提案を実現していくことが、貴大学の社会的評価を高めるための最善の方策である。大学に求められていることは、「教育の質の保証」である。貴大学は、リベラルアーツを重視し、深い教養を土台とするポリシー、プライドを持ち、自覚した活動を求められている。インタビュー調査で出された意見をまとめると、受験生は卒業後の就職に高い関心があるものの、貴大学が「就職予備校化」や「専門学校化」することは期待しておらず、大学としての質の高い特色ある教育を望んでいる。

全教職員が建学の精神、教育の理念に立ち返り、危機感とスピード感を持って改革に取り組む覚悟を持つことが求められている。是非検討していただきたい。

1 大学として目指す姿及び教育について

貴大学が東北地域において大きな存在感と知名度を有していることは、過去も現在も変わっていない。ただし、学生の意欲・レベルについては、かつてのそれとは異なり、確実に低下しているという厳しい指摘があった。大学に求められているものとして、ネームバリューと就職率だけではなく、「学びたい分野を学ぶことができる」、「社会をしっかりと支えられるような人物に育てる」ことに視点がシフトしている。これは受験生だけではなく、保護者や高校教員、そして大学卒業後に受け入れる社会からの要望でもある。若者一人ひとりを育てていくためには、高校と大学、社会が目的を共有し、連携する取組みを欠かすことはできない。既に高大連携の取組みを行っている貴大学においても、取組みの効果をあらためて検証するとともに、高校側との情報交換と大学教育への反映をより一層加速していただきたい。

教育の質を保つために不可欠となるのが、「トップクラスの学生をどう育てたいか、どうなって欲しいか」というビジョンの明確化である。選ばれる大学の要件は、それらビジョンの明示と、実現するための教育について、具体的な仕組みを実行していることである。その上で、成績上位者に対して教育の質を保証していくと同時に、様々な学力を持つ学生に対しても、勉学意欲を維持・向上させるケアが必要である。これは、今以上に一人ひとりを見ていく姿勢が求められていることと同じである。どの学生も勉学に励む意欲を持ち、学内が生き活きとした雰囲気になりあふれることで、教育の質と学生の学力の向上につながっていくと考えられる。その意味でも、図書館の一角だけではなく、いわばキャンパス全体が「ラーニング・コモンズ」の雰囲気を醸し出すような方策も、効果が期待できるものとして提案したい。

また、社会に出るための心構えとして、キャリア教育や社会実習の取組み（インターシップ、ボランティア、アルバイト、その他社会活動など）等、大学側がその機会を積極

的に提供するとともに、そのような活動を推奨していくことが強く求められている。現在でも、全学的にも、学部・学科・教員個々としても、学内にはそれらの機会を与えるような様々な取り組みが存在する。ただし、どれほど良い取り組みであっても、その存在と魅力を広く知らしめなければ、学生に認識されないままである。学生達がこれらの取り組みを知り、参加へつなげるためにも、効果的な広報活動が必要である。

2 東北学院大学の魅力の再認識と情報発信について

インタビュー調査の結果、個々人の単位で見れば、熱心に教育・研究に取り組む教員がいることや、優秀で人間性にも優れた学生が学外において活躍していることが明らかになった。しかしその一方で、各学科・学部や大学としても実に多彩な取り組みを行っているものの、それらの活動に直接触れていない学外者には、「見えていない」、「印象に残っていない」という状況にある。

大学全体として行うべきは、学内の良い取り組みの情報を集約し、学内外においてその取組内容をわかりやすく、効果的な方法で周知していくことだろう。

一つひとつの取り組みにスポットを当て、学内外に広く広報することで、職員一人ひとりが実情を良く理解した上で広報活動を行うことができる。これは、教職員自身について、効果的な広報活動に必要な能力・効果の向上を望むことができ、さまざまな分野への広報活動の展開・実施に向けたモチベーションアップにつなげることが可能となる。また、広報活動は、マスコミ、市民講座を通して魅力的な研究を広報するなど、体系的に行っていく必要がある。これには、同窓会の支部活動を巻き込むことも効果的であろう。高校生や市民が参加したくなるような公開講座や学生・教員の地域貢献活動をより積極的に行い、それをマスコミに取り上げてもらえるよう、情報発信の工夫に努めていただきたい。

3 高大連携の強化と高校との対話について

平成 26 年度外部評価の取組みとして、初めて高校教員及び予備校関係者を対象としたインタビュー調査を行った。この中では、東北地域のみならず九州や関西圏の大学の取組みも紹介され、画期的かつ積極的な活動を行っている大学との対比により、貴大学が力を注ぐべき事柄を浮き彫りにすることができた。これら貴大学に対するイメージ、要望は的確かつ強烈なインパクトをもたらすものであり、一つひとつの意見について、改革の活路を見出すための重要な手がかりとして活用いただきたい。

さらに、貴大学に対して「教育機関としての使命を自覚し、東北地域を背負っている気概とプライドを持って、地域に根差した活動や貢献できる人材を育成して欲しい」という心からの期待と応援の言葉を送っていただいた。全教職員においては、ぜひこの熱意を感じ取っていただきたい。また、直に批判の声を聞くことは、貴大学が高校に意識されていること、「こうであって欲しい」という期待を実感できる機会でもある。その熱意を感じ、自分事として捉えていただくためにも、ぜひ多くの教職員がこのような場で直接意見を聞き、受け止めるという機会の設定を提案したい。

高校教員から「地理的な距離で『近いから分かるだろう』』という意識が、かえってお

互いを知らなくさせている」という意見があったように、既存の知名度のみに頼ることは、もはやできないだろう。

そこで、貴大学が示すべき姿勢こそ、今以上に積極的に高校側へ赴き、就職率や資格よりも先に大学の教育の中身を示し、「本学では入学者をこのような人物に育てる」ということを理解してもらうことである。なお、オープンキャンパスだけでは知ってもらうことのできない大学の中身を理解してもらうためには、日常的に高校生が大学に来る機会を設けることも効果的であろう。

また、高校生とあわせて、進路指導を行う高校教員に大学を知ってもらうための工夫も必要である。生徒に勧めたくても、「年1回の説明会で関わっただけ」というだけではリアルなイメージを生徒に紹介をすることができない。高校教員にこそ、大学の施設を直接見てもらいながら、大学教員との対話から具体的な研究や魅力的な取組みを感じてもらうことで、大学の印象も強く残り、生徒に紹介しやすくなると考えられる。

これらの実現に向けては、高校訪問時における大学の取り組みの紹介、施設見学も兼ねた大学を会場とする説明会の実施といったアプローチが考えられるので、是非検討していただきたい。

高校では、既に「生徒が自身の将来を考えるトレーニング」に取り組んでおり、高校生は、それを経た上で進学先を選定している。貴大学においても、既に協力している仙台向山高校のアカデミック・インターンシップに代表されるような取組みを他高校にも広げるなど、高大連携を効果的に展開していくべきである。このように、高校生の実情の把握と大学の情報提供及び広報活動、高大連携を視野に入れた教育をぜひ実現して欲しい。いずれ、その活動が実を結び、意欲的な学生が期待を持って大学に入学し、充実した学生生活を経て、希望を持って社会に出て行くことが理想的である。

IV 総評

今回、いずれの調査対象者からも、東北地区の伝統ある私立総合大学としての社会的な評価、リベラルアーツ教育を基礎にした総合大学という特性を生かした将来への期待、また、今後ぜひ改善してもらいたい事項など、忌憚のない意見と提案が述べられた。

インタビュー調査方法に関して、平成 26 年度はよりリラックスできるようグループ形式でインタビューを実施したところ、調査対象者同士による意見交換もより活発に行われた。その結果、相互に他の対象者の意見に引き出される形で、より忌憚のない意見まで引き出すことが可能になったと考えている。

卒業生からは、在学時の東北学院大学の教育や大学生活について率直な意見を聞くことができた。卒業後 2～5 年の社会人として現在の視点に立った大学への想い、提案なども得ることができ、有益な機会となった。貴大学に対しては、全体的に大変好意的な意見が多かった一方、「自分の知人へ勧めるか」、「将来自分の子供を入学させたいか」との問いには、「全てにおいてそうとは言えない」と回答する者が多かった。

高校教員・予備校関係者についても、真摯かつ率直な意見及び情報を提供していただいた。また、極めて具体的に東北学院大学の問題点を指摘していただき、中には、想定を超えた回答も見られるなど、一つひとつが改革への取り組みにつながるものであった。さらに、予備校関係者は、高校教員とは異なり全国の大学との比較で貴大学を位置づけし、学力・教育面からだけでなく、多角的視点から厳しい評価をいただいた。また、ある回では、女子大学ならではの他大学情報も得ることができた。

総じて、どのグループでも「東北学院大学の魅力を表現する力が弱い」、「大学自身がその魅力に気付いていないのではないか」、という指摘があり、あらためて貴大学の魅力の再発見に努め、教職員全員がそれらを意識しながら教育・運営活動に臨んでいただきたい。

東北学院大学の全般的な印象は、「伝統と東北地方に広く根を張る卒業生に支えられた大学」というものである。外部評価委員会としては、地域に根ざした大学を目指して取り組みを強化するとともに、それを地域社会に強く発信していくことが重要になってくると考える。

一方で、貴大学発祥の礎となっているキリスト教に基づく建学の精神については、社会や受験生に浸透しているとは考えられなかった。キリスト教の教えが盛り込まれた建学の精神は本来強いメッセージ性を放つはずである。

今回のインタビュー調査対象者については、卒業生は、昨年度と比べて在学時に委員会活動や部活・サークルなど課外活動を熱心に行った卒業生が多かったとの印象を持った。平成 27 年度以降の調査上の課題としては、学科別の選出人数である。当初、全学部卒業生への調査を計画していたものの、事情により工学部学生の回答を得ることができなかった。加えて、割合的に一番人数が多い経済学部卒業生が少なかったことから、全学部卒業生の意見を得ること、また学科の人数比率も考慮して選出することが望ましい。

ここ 2 年のインタビューでは、高校から大学へ送り出す立場で、卒業生からは学生生

活を送って貴大学の内側を見た立場としての意見を収集できたため、今後は教育の成果に対する客観的評価を得るべく、新たに卒業生の就職先企業を調査対象者に加える必要があると考えられる。

最後になるが、今回、インタビューにおいて委員が感じた熱を間接的に伝えることは難しいものであったが、貴大学が、この報告書に記したマイナスの評価及び批判も含めた貴重な意見を厳粛に受け止め、学内で共有し、応えていくことを切に願って止まない。

參考資料

平成26年度 東北学院大学外部評価委員会 委員名簿

(敬称略)

No.	職名1	職名2	氏名	根拠規程1	根拠規程2	任期
1	委員	石巻専修大学 学長	坂田 隆	第5条第2項第1号	大学等の教育機関の教員	H25. 4. 1～ H28. 3. 31
2	委員	東北大学 高度教養教育・学生支援機構 高等教育開発部門長 教育評価分析センター長	関内 隆	第5条第2項第1号	大学等の教育機関の教員	H25. 4. 1～ H28. 3. 31
3	委員	株式会社清月記 社長	菅原 裕典	第5条第2項第2号	経済界の関係者	H25. 4. 1～ H28. 3. 31
4	委員	多賀城市長	菊地健次郎	第5条第2項第3号	本学の所在する地域の関係者	H25. 4. 1～ H28. 3. 31
5	委員	山形県立米沢女子短期大学 元学長	遠藤 恵子	第5条第2項第4号	本学に在職した経験を有する者	H25. 4. 1～ H28. 3. 31
6	委員	仙台市 元副市長	加藤 義雄	第5条第2項第5号	本学の学部を卒業した者、または大学院を修了した者	H25. 4. 1～ H28. 3. 31
7	委員	宮城県仙台南高等学校 元校長	須藤 亨	第5条第2項第6号	前号までに定める者以外に、大学に関し広くかつ高い見識を有する者	H25. 4. 1～ H28. 3. 31

○東北学院大学外部評価委員会規程

平成 20 年 4 月 1 日
制定

改正 平成 22 年 6 月 1 日

(設置)

第 1 条 東北学院大学（以下、「本学」という。）に、東北学院大学点検・評価に関する規程第 15 条および第 16 条に定める外部評価を実施する機関として、東北学院大学外部評価委員会（以下、「委員会」という。）を置く。

(目的)

第 2 条 委員会は、本学が作成した点検・評価報告書に基づいて第三者の立場から評価し、本学の教育・研究水準の向上および組織の活性化に資する提言を行う。

(評価項目)

第 3 条 評価項目については、東北学院大学点検・評価に関する規程第 3 条および同規程別表、ならびに東北学院大学大学院法務研究科点検・評価に関する規程第 3 条および同規程別表に定める諸項目に準じて、東北学院大学点検・評価委員会（以下、「点検・評価委員会」という。）が検討し、学長に提案する。

2 前項の規定にかかわらず、点検・評価委員会による提案、委員会による評価のいずれの場合においても、前項に定める項目の趣旨を損わない限りで、評価項目を簡略化することができる。

(評価の時期)

第 4 条 委員会による評価・答申が実施される年度は、大学基準協会による評価を含む外部評価の実施の間隔が 2 年を超えないように、適切に決定されるものとする。

2 委員会による評価・答申が実施される年度に関しては、点検・評価委員会が検討して学長に提案する。

(組織の構成)

第 5 条 委員会は、委員若干名で構成される。

2 委員は、次に掲げる者のうちから、大学の運営に関して広くかつ高い見識を持つと思われる者を学長が選考し、委嘱する。

- (1) 大学等の教育機関の教員
- (2) 経済界の関係者
- (3) 本学の所在する地域の関係者
- (4) 本学に在職した経験を有する者
- (5) 本学の学部を卒業した者、または大学院を修了した者
- (6) 前号までに定める者以外に、大学に関し広くかつ高い見識を有する者

3 委員の任期は 3 年とし、再任を妨げない。

4 学長は、委員を委嘱した場合、委員の氏名・所属等を、速やかに点検・評価委員会に通知するとともに、公表する。

- 5 委員会には、点検・評価委員会委員長のほか、本学の点検・評価に責任を持つ専任教職員が、必要に応じて陪席する。

(委員長および副委員長)

第6条 委員会に委員長及び副委員長一人を置き、委員の互選で定める。

- 2 委員長は、委員会の業務を統括する。
- 3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、その職務を代行する。

(委員会の運営)

第7条 委員会は、学長の要請に応じて委員長が招集し議長となる。

- 2 委員会において検討されるべき事項、および評価を行う年度等については、点検・評価委員会の提案をふまえて、学長が委員会に提示するものとする。
- 3 委員会は、第2条および第3条に基づいて行われた評価の結果および改善を求める提言事項を外部評価報告書にまとめ、学長に提出する。
- 4 学長は、前項に定める外部評価報告書を、点検・評価委員会に報告する。
- 5 委員会は、外部評価報告書を作成することとはされていない年度にあっても、少なくとも年に1回は開催され、本学が行っている事業に関する簡略な報告を受けるものとする。
- 6 学長がこの規程にかかわる行為を行うにあたっては、点検・評価委員長が補佐する。

(守秘義務)

第8条 委員会の委員は、この規程に基づく評価を行う際に知り得た事項のうち、秘すべきとされた事項は、他に漏らしてはならない。

(事務取扱)

第9条 委員会の事務は、学長室学長室事務課が行う。

(規程の改廃)

第10条 この規程の改廃は、学長との協議を経て点検・評価委員会が発議し、全学教授会および大学院委員会の議を経て、理事会の承認を得るものとする。

附 則

この規程は、平成20(2008)年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成22(2010)年6月1日から施行する。

第2期東北学院大学外部評価 概要

平成 25 年 7 月 1 日外部評価委員会

1. 東北学院大学の外部評価について

本学は、学校教育法に基づく自己点検・評価及び認証評価に加えて、第三者による教育・研究活動の評価を受けることにより、教育・研究水準の向上と組織の活性化を図ることを目的として、平成 20 年 4 月に「東北学院大学外部評価委員会規程」を制定しました。

その後、平成 21 年 3 月に第 1 期外部評価委員会が発足し、平成 25 年 3 月まで毎年外部評価（計 3 回）を実施しました。

このたび、第 1 期外部評価委員会の任期満了に伴い、平成 25 年 4 月に第 2 期外部評価委員会が発足しました。

2. 第 2 期外部評価について

(1) 第 1 期外部評価委員会からの引き継ぎ事項

平成 24 年度の外部評価委員会におきまして、次年度以降の外部評価について大学と協議を行い、以下の事項を確認しました。

また、平成 25 年 4 月 18 日（木）に開催した点検・評価委員会で、これらを念頭に置いた外部評価の実施を承認しました。

- ①自己点検・評価や認証評価との差別化を図る。
…評価対象・時期等の重複の回避、大学内部の PDCA サイクルの循環の促進
- ②評価に係る双方の負担を軽減する。
…評価資料そのものや教職員の負担の削減
- ③新たな評価手法として、在学生や卒業生などへのインタビューなどを検討する。
…大学自己点検・評価の項目にはないステークホルダーからの生の意見聴取

(2) 第 2 期外部評価の概要（点検・評価委員会提案）

- ①評価年度：平成 25～27 年度、3 年間 3 回
- ②調査対象：在学生、卒業生、企業等（卒業生の就職先の企業等が望ましい）
→ 1 年目を在学生、2 年目を卒業生、3 年目を企業等、とする。
在学生については、状況に応じて継続して調査対象とする。
- ③評価方法：外部評価委員会によるインタビュー調査を行い、その結果をもとに大学に対する指摘、助言等を行う。
- ④評価項目：学習成果や学生生活、大学への要望など

以上

平成 26 年度外部評価インタビュー調査 実施要領

1. 目的

大学のステークホルダーである卒業生及び高等学校進路指導担当教諭・予備校講師など地域社会に対して、大学の教育環境・成果等に関するインタビュー調査を実施し、その内容をもとに外部評価を行い、もって大学の活性化に資する提言を行うこと。

2. インタビュー調査の概要

(1) インタビュー対象について

①対象

- ・卒業生（卒業後 3～5 年） … 15 名程度（全学部 1 名以上）
- ・高等学校進路指導担当教諭 … 7～10 校程度
- ・予備校講師 … 3 校

②抽出方法

- ・各教学部門を中心に候補者を選出し、点検・評価委員長及び外部評価委員長が決定する。
- ・候補者に関する条件は、特段付さない。

(2) インタビュー内容・方法について

卒業生、高等学校進路指導担当教諭・予備校講師それぞれ下記①～③を柱とし、自由に質問していただきます。

【卒業生】

- ①東北学院大学の教育についての要望、良い点、改善を要する点
- ②東北学院大学の教育以外の事項についての要望、良い点、改善を要する点
- ③東北学院大学の社会的評価の向上にむけた意見・提案

【高等学校進路指導担当教諭・予備校講師】

- ①東北学院大学を「どう評価しているか」や「どう指導しているか」
- ②東北学院大学の「魅力なところ」や「改善が望まれるところ」
- ③東北学院大学の社会的評価の向上にむけた意見・提案

3. 評価の流れ

(1) インタビュー調査当日（所要時間：3 時間程度）

① 事前打ち合わせ（10 分程度）

- ・外部評価委員に対して、点検・評価委員長又は事務局よりインタビュー調査実施にあたっての簡単な説明を行います。

② インタビュー調査(複数回の休憩を含め、1 時間 30 分～2 時間)

[対象：卒業生]

- ・卒業生5人程度を1チームとし、外部評価委員2名程度がインタビューを実施します。

[対象：高等学校進路指導担当教員・予備校講師]

- ・高校、予備校3、4校を1チームとし、外部評価委員2名程度がインタビューを実施します。

④事後打ち合わせ

- ・大学への概要を報告していただき、今後の流れの確認を行います。

(2) 評価作成

- ①各委員は、インタビュー調査結果をもとに評価を行い、その原案を後日委員長（事務局）に提出していただきます。（締切日等は別途ご連絡いたします。）
- ②評価にあたっては、『大学案内』などの基礎資料もご活用ください。
- ③評価成案の作成とともに、委員会としての総括及び各委員からの提言を取りまとめ、『外部評価報告書』を作成します。

4. スケジュール

時期	活動予定
9月1日（月）	第1回外部評価委員会
10月～11月中旬	外部評価委員長、点検・評価委員長および事務局での打ち合わせ並びにインタビュー対象者選出
11月29日（土）	インタビュー調査（卒業生①、高校・予備校①）
12月1日（月）	インタビュー調査（高校・予備校②）
12月6日（土）	インタビュー調査（卒業生②）
12月8日（月）	インタビュー調査（高校③）
12月10日（水）	インタビュー調査（高校・予備校④）
1月～2月	評価結果取りまとめ
2月～3月	第3回外部評価委員会、評価結果確定、『外部評価報告書』提出

※第2回外部評価委員会はインタビュー実施をもって開催したことから。

5. 問い合わせ先

東北学院大学外部評価委員会事務局
 （学長室事務課 菊地、相澤、土佐）
 〒980-8511 仙台市青葉区土樋 1-3-1
 TEL.022-264-6424／FAX.022-264-6364
 E-Mail ck@staff.tohoku-gakuin.ac.jp

平成26年度外部評価インタビュー調査 スケジュール
合計5日・6回実施

1日目

○日時：平成26年11月29日（土）9時45分～17時30分

○会場：東北学院大学土樋キャンパス8号館（3階）第2会議室

時間	内容	会場	評価委員担当者	対象者
9：45～9：55	事務連絡	本館応接室	加藤副委員長 菅原委員	
各会場に移動				
10：00～12：00 *休憩含む	インタビュー調査	第2会議室	加藤副委員長 菅原委員	卒業生4名（）は卒業年度 文学部（平成23） 文学部（平成22） 経営学部（平成24） 教養学部（平成23）
本館応接室に移動				
12：05～12：30	評価に関する打ち合わせ、 事務連絡	本館応接室	加藤副委員長 菅原委員	
12：30～14：45				
14：45～14：55	事務連絡	本館応接室	坂田委員 須藤委員	
各会場に移動				
15：00～17：00 *休憩含む	インタビュー調査	第2会議室	坂田委員 須藤委員	仙台南高校 仙台育英高校 養賢ゼミナール
本館応接室に移動				
17：05～17：30	評価に関する打ち合わせ、 事務連絡	本館応接室	坂田委員 須藤委員	

2日目

○日時：平成26年12月1日（月）14時45分～17時30分

○会場：東北学院大学土樋キャンパス8号館（3階）第2会議室

時間	内容	会場	評価委員担当者	対象者
14：45～14：55	事務連絡	本館応接室	遠藤委員長 菅原委員	
各会場に移動				
15：00～17：00 *休憩含む	インタビュー調査	第2会議室	遠藤委員長 菅原委員	尚綱学院高校 河合塾（2名）
本館応接室に移動				
17：05～17：30	評価に関する打ち合わせ、 事務連絡	本館応接室	遠藤委員長 菅原委員	

3日目

○日時：平成26年12月6日（土）9時45分～12時30分

○会場：東北学院大学土樋キャンパス8号館（3階）第2・3会議室

時間	内容	会場	評価委員担当者	対象者
9:45～9:55	事務連絡	本館応接室	遠藤委員長 加藤副委員長 関内委員	
各会場に移動				
10:00～12:00 *休憩含む	インタビュー調査	第2会議室	遠藤委員長 加藤副委員長 関内委員	卒業生5名（）は卒業年度 文学部（平成21） 経済学部（平成22） 法学部（平成22） 法学部（平成23） 教養学部（平成21）
本館応接室に移動				
12:05～12:30	評価に関する打ち合わせ、 事務連絡	本館応接室	遠藤委員長 加藤副委員長 関内委員	

4日目

○日時：平成26年12月8日（月）14時45分～17時30分

○会場：東北学院大学土樋キャンパス8号館（3階）第2会議室

時間	内容	会場	評価委員担当者	対象者
14:45～14:55	事務連絡	本館応接室	遠藤委員長 関内委員	
各会場に移動				
15:00～17:00 *休憩含む	インタビュー調査	第2会議室	遠藤委員長 関内委員	仙台東高校 仙台向山高校 古川高校 聖カスリ学院英智高校
本館応接室に移動				
17:05～17:30	評価に関する打ち合わせ、 事務連絡	本館応接室	遠藤委員長 関内委員	

5日目

○日時：平成26年12月10日（水）14時45分～17時30分

○会場：東北学院大学土樋キャンパス8号館（3階）第2会議室

時間	内容	会場	評価委員担当者	対象者
14:45～14:55	事務連絡	本館応接室	遠藤委員長 加藤副委員長	
各会場に移動				
15:00～17:00 *休憩含む	インタビュー調査	第2会議室	遠藤委員長 加藤副委員長	仙台三桜高校 宮城学院高校 代々木ゼミナール（1名）
本館応接室に移動				
17:05～17:30	評価に関する打ち合わせ、 事務連絡	本館応接室	遠藤委員長 加藤副委員長	

平成 26 年度 第 1 回 東北学院大学外部評価委員会 議事録

- 日 時：平成 26 年 9 月 1 日（月）15 時 35 分～16 時 40 分
- 場 所：東北学院大学土樋キャンパス 8 号館（3 階）第 3 会議室
- 委員出席者：遠藤恵子（委員長）、加藤義雄（副委員長）、坂田隆、関内隆、菅原裕典、菊地健次郎（以上、委員）
- 陪 席 者：松本宣郎（学長）、佐々木俊三（総務担当副学長）、斎藤誠（学務担当副学長、点検・評価委員会委員長）、辻秀人（文学部長）、原田善教（経済学部長）、菅山真次（経営学部長）、高木龍一郎（法学部長）、中沢正利（工学部長）、佐久間政広（教養学部長）、仁昌寺正一（経済学研究科長）、石橋良信（工学研究科長）、櫻井研三（人間情報学研究科長）、佐々木哲夫（宗教部長）、石塚秀樹（学生部長）、前田修也（就職キャリア支援部長）、楊世英（国際交流部長）、日野望（情報システム部長）、日野哲（総務部長）、木村安博（施設部長）、八島康治（庶務部長）、若生克義（人事部長）、遠藤健一（広報部長）、駒板高明（財務部長）、斎藤信二（総務部次長）、小松隆（多賀城キャンパス担当総務部次長）、佐藤光男（泉キャンパス担当総務部次長）、菊地祐一（学長室事務課長）、相澤孝明、土佐彩絵子（以上、事務局：学長室事務課）
- 配付資料：資料 1：外部評価委員会 委員名簿
資料 2：東北学院大学外部評価委員会規程
資料 3：前回議事録（平成 25 年度第 3 回外部評価委員会）
資料 4：第 2 期東北学院大学外部評価 概要
資料 5：平成 26 年度外部評価計画表（案）
参考：関係資料一式（『大学案内 2015』、『平成 25(2013)年度事業報告書』、平成 26 年度『地（知）の拠点整備事業』申請書及び選定結果通知等、「卒業時意識調査」結果[2010-2013 年度]、「新入生意識調査」結果[2014 年度]、オープンキャンパス来場者数推移[2011-2014 年度]）
- 司会：斎藤誠（点検・評価委員会委員長）

1. 開会

- (1) 黙祷
（録音了承）
- (2) 配付資料の確認
- (3) 東北学院大学学長挨拶
- (4) 出席者の紹介
- (5) 東北学院大学の近況報告
- (6) 前回議事録の確認
・既に各委員の承認を得ていることについて報告がなされた。

2. 議事【議長：委員長】

(1) 平成 26 年度の外部評価について

- ・遠藤委員長：平成 26 年度の外部評価について、平成 25 年度第 3 回外部評価委員会では、継続してインタビュー調査を実施したほうがよいのではないかという意見があり、外部評価報告書にもそのように記載した。しかしながら、評価の方法、内容については、まだ検討していない状態である。

評価の方法については、平成 25 年度の評価報告書に基づき、平成 26 年度も継続してインタビュー調査を行うということにしたいと考えているが、各委員のご意見を伺いたい。

(意見なし)

- ◎遠藤委員長：それでは、意見が無いようなので、平成 26 年度は継続してインタビュー調査を実施することにする。

- ・遠藤委員長：評価の方法が決定したので、次にインタビュー調査の対象者について検討を行いたい。平成 25 年度は、在学生及び卒業生を対象としていたが、平成 26 年度は誰を対象とするか、各委員のご意見を伺いたい。また、大学側から調査対象者について、要望等があれば併せて伺いたい。

なお、委員長としての意見を先に述べさせていただくと、卒業生について、平成 25 年度は大学時代の印象が反映されるよう、卒業後 3～5 年程度の方を対象としていたが、もう少し卒業後の年数を広げてよいのではないか。また、在学生について、これは大学からの意見でもあるが、既に様々な調査によって情報を得ているという状況があることから、平成 26 年度の調査から対象外にしてもよいのではないかと考えている。

さらに、個人的な意見であるが、高等学校の進路指導担当教員を対象とすることはどうかと考えている。

- ・菅原委員：在学生を調査の対象外とすることについては、賛成である。卒業生については、卒業後の年数が経過するにつれ母校愛が出てくることが予想されることから、平成 25 年度と同様に、卒業後 3～5 年がよいのではないか。また、高等学校の進路指導担当教員について異論はないが、加えて学習塾の講師も対象としてはどうかと考えている。

なお、話が逸れるが、本外部評価で得られた結果をオープンキャンパス等に反映されるとよいと考えている。

- ・加藤副委員長：平成 25 年度の外部評価報告書について、その後の大学の対応についてお話を伺い、それを踏まえて対象者及び内容を決定した方がよいのではないか。
- ・菊地委員：在校生をインタビュー調査の対象外とすることについて異論はない。ま

た、卒業生は、卒業後5年以内がよいのではないかと考えている。高等学校の進路指導担当教員について、メリットもあれば、教員の個人差が出てしまうというデメリットもあることから、個人的には、慎重な議論が必要だと考えている。

- ・ 関内委員：基本的に委員長提案に賛成であるが、卒業後の年数については、5年程度がよいのではないかと考えている。

また、高等学校の進路指導担当教員について、アイデアとしてはよいと思うが、おそらく大学の広報に関する評価が多くなるだろう。また、高等学校の同窓会などで、現在の大学教育等について話を聞く機会もあることから、教育分野に関する評価がなされる可能性もある。そのため、どういうことを聞きたいのかを大学側及び外部評価委員側で明確に決めた上で実施したほうが、よい意見を聞くことができるだろう。

- ・ 坂田委員：卒業生の意見を聞くことは重要であるが、カリキュラムが頻繁に変更されている現状を踏まえると、現在のカリキュラムに近い卒業生の意見を聞いたほうが効果的だと考えている。在校生について、本日、配付されている資料を読む限り、しっかりと状況把握をされていると見受けられるため、外部評価委員会であらためて調査を行う必要はないと考えている。

さらに、高等学校の進路指導担当教員について、全ての学校を対象とすることは難しいと思われるため、選抜する必要が出てくるが、これがなかなか難しいだろう。ただし、実施する意義はあると考えている。また、先ほど関内委員からもご発言があったが、共通の質問項目を設定して調査を行う必要はあるだろう。

なお、個人的な意見として、東北学院大学は就職に強いという印象を持っている。そのため、就職先の企業・行政・団体に大学の評価を行ってもらおうということはいかがだろうか。

- ◎ 遠藤委員長：各委員の意見を踏まえると、平成26年度のインタビュー調査の対象は、卒業後約9年以内の卒業生、高等学校の進路指導担当教員及び学習塾の講師とし、在校生は対象外とする。また、就職先の企業・行政・団体については、来年度の実施に向けて継続的に検討を行うこととし、平成26年度のインタビュー調査の対象としないこととする。

なお、高等学校の進路指導担当教員及び学習塾の講師の選抜や共通の質問項目については、大学側と協議を行い、外部評価委員会にあらためて提案を行うことにしたい。

大学側からこのことについて、意見等があれば、ご発言いただきたい。

- ・ 斎藤副学長：加藤委員からご指摘のあった事項について、平成25年度外部評価報告書に対する本学の対応であるが、全学的に統一させた対策は現在のところ、行っていない。ただし、卒業生からの意見は大学側が想定している内容を超えるものであった。就職キャリア支援部でこれらの意見について検討をしているところであり、このことについては前田就職キャリア支援部長から述べさせていただく。
- ・ 前田就職キャリア支援部長：平成26年3月末日時点の就職率は90.3%であった。卒業生及び就職先に対してインタビュー調査を行うということについては、よいことだと考えている。

就職キャリア支援部では、卒業及び就職後半年が経過した頃にアンケート調査を実施している。半年後というのは、研修が終了した最も厳しい時期であると考え、この時期を設定している。

もし、外部評価においてインタビュー調査を行うとすれば、この半年後のアンケート調査があることに鑑み、卒業及び就職後3・5・7年が経過した頃の学生を対象にしていただけるとよい比較ができるものと考えている。

なお、就職先の企業の中には、本学のOBも多く在籍しているため、参考にさせていただきたい。

- ・斎藤副学長：そのアンケート調査の中に、教育について問われている設問はあるのか。
- ・前田就職キャリア支援部長：そのような設問はない。
- ・遠藤委員長：今話を聞くと、就職キャリア支援部が行っている調査では、卒業生から大学教育に関する意見を聞くことはあまりないということか。
- ・前田就職キャリア支援部長：そうである。
- ・菅原委員：「大学案内 2015」の中に「東北学院大学で身につく4つの力」という箇所があるが、大学では4年間でこれらの力を身につけるためにどのような教育を行っているのか。
- ・前田就職キャリア支援部長：TG ベーシックという教育体系の中で、「キャリア形成と大学生活」という科目を設置しており、7～8割の学生が受講している。平成26年度で3年目となり、そろそろ効果が出てくる時期である。3～4年になり、急に就職活動を行うというのは無理があり、その前の学生において、将来の自分のイメージを持たせる教育が必要であると考え実施している。
- ・加藤委員：インタビュー調査を実施するにあたって、大学側と密な連携が必要であると考えている。外部評価委員という職務上、大学と齟齬があってはならない。そのためにも、大学が既に持っている情報等を基に協議を行い、質問項目等を決定する必要があると考えている。

また、インタビュー調査は、1回限りとせず、継続して実施していくことが必要だろう。

(2) 今後の予定について

- ・遠藤委員長：資料5では、平成26年度の外部評価は、委員会の開催回数を3回とし、インタビュー調査はこの回数に含めないこととしたい。また、インタビュー調査は、2人または3人を1組とし実施する。調査の日程調整については、追って行う。
 - ・斎藤副学長：インタビュー調査について、平成25年度の委員会で、対象者を1名ずつではなく、グループで行ってもよいのではないかという意見がだされたと記憶しているが、どのように行うこととするのか。
- ◎遠藤委員長：調査の方法等については、先ほどの意見を含めて大学側と協議し、インタビュー調査を行う前に、第2回の委員会で決定することとする。また、インタビュー終了後にインタビュー調査の取りまとめ、外部評価報告書の承認及び大学側

への提出のためにそれぞれ委員会を開催することとする。総括すると、今年度は本日の委員会を含め、委員会を4回開催し、そのほか、別途インタビュー調査を行うこととする。

(3) その他

- ・ 齋藤副学長：先に質問があった外部評価報告書の活用方法について、簡単ではあるがお答えしたい。在学生からの指摘については、学長への投書箱や各種アンケートの結果と外部評価の結果に大きな相違は見られなかったが、いずれにも意見として出されている現状を踏まえ、改善の方向で動いている。卒業生については、就職キャリア支援部が就職との関係での調査は行っているものの、組織として教育に関する意見集約を行ったことはなく、同窓会などで散発的に意見を収集しているに過ぎず、それらの意見がどの程度普遍的なものなのかの判断がつかない状況である。そういう意味では、外部評価で指摘された意見は参考になっているものの、具体的でない部分もあり、判断に困る面もある。
- ・ 松本学長：外部評価報告書で指摘された事項について、学内で周知するよう指示を出している。特に、インフラ整備などの指摘については、前向きに検討し、改善を進めているところである。なお、先ほど齋藤副学長からも話をしたが、指摘事項について、より踏み込んだ指摘をしていただいても良いのかもしれない。また、外部評価委員には、さらに大学の詳細な状況等についてお知らせできるようにしたほうが、より深い議論が行えるのではないかと考えている。今後とも様々なご指摘をよろしくお願ひしたい。
- ・ 関内委員：東北学院大学の外部評価はどのような位置づけの下に行われているものなのか。資料4にある点検・評価委員会とはどのような委員会なのか、また、外部評価委員会との関係性についてお伺ひしたい。本来、外部評価とは、各大学の自己点検・評価について、第三者の視点で評価するものであると認識している。
- ・ 齋藤副学長：外部評価委員会に行っていただく点検・評価の項目の検討を行っているのが、本学の自己点検・評価委員会である。第1期は本学の自己点検・評価について、そのしくみの評価と問題点の指摘をお願いした。方法としては、自己点検・評価報告書を読んでいただく方法を取った。これを経て、活動の評価というよりは、もっと特徴を出した方が良いという結論に至り、これが第2期の出発点である。ただし、どのように外部評価委員会に活動していただくことが、本学の点検・評価にとって有効であるかはまだ手探り状態である。
- ・ 関内委員：大体理解した。自己点検・評価報告書は何年毎に作成されているのか。
- ・ 齋藤副学長：3年毎である。これに加え、認証評価受審時には規模の大きな報告書を作成することになる。後日、平成24年度の自己点検・評価報告書をお渡ししたい。

5. 閉会

以上

平成 26 年度 第 2 回 東北学院大学外部評価委員会 議事録
(11 月 29 日～12 月 10 日実施インタビューをもって第 2 回委員会とする)

- 日 時：インタビュー実施日は下記期間のうちの 5 日間
 平成 26 年 11 月 29 日（土）～平成 26 年 12 月 10 日（水）
 午前：9 時 40 分～12 時 30 分 午後：14 時 45 分～17 時 30 分
 ※詳細の実施日、インタビュー対象、インタビュアーを下記に記載
- 場 所：東北学院大学土樋キャンパス 8 号館（3 階）第 2 会議室
- 委員出席者：遠藤恵子（委員長）、加藤義雄（副委員長）、坂田隆、関内隆、菅原裕典、須藤亨（以上、委員）
- 陪 席 者：菊地祐一、相澤孝明、土佐彩絵子（以上、事務局：学長室事務課）
- 配付資料：資料 1：平成 26 年度外部評価インタビュー調査 実施要領
 資料 2：平成 26 年度外部評価インタビュー調査 スケジュール（実施内容）
 資料 3：平成 26 年度外部評価インタビュー対象者
 資料 4：インタビュー調査メモ用紙
 資料 5：報告記入シート作成要領
 資料 6：報告記入シート【卒業生】、【高校教員・予備校関係者】

1. 開会

- (1) 配付資料の確認
- (2) インタビュー実施内容、本日の流れについて
- ・ 事務局：インタビュー実施内容検討の過程を説明する。第 1 回外部評価委員会終了後、10 月～11 月中旬に遠藤恵子外部評価委員長、斎藤誠点検・評価委員長及び事務局での打ち合わせ（計 3 回）を行ったのち、対象者選出を行うとともにインタビュー調査実施日を計画、実施要領（資料 1）作成した。
 対象者選出にあたって、卒業生は就職キャリア支援課、学生課、総務課に、高校教員・予備校関係者は入試課に協力を依頼した。
 - ・ インタビュー調査 スケジュール（資料 2）及び対象者（資料 3）は資料のとおり。
 インタビュー実施時間 午前：10 時～12 時 午後：15 時～17 時

実施日	インタビュー対象者（インタビュアー）
11 月 29 日（土）	午前：卒業生 4 名（加藤副委員長、菅原委員） 午後：仙台南高校、仙台育英高校、養賢ゼミナール（坂田委員、須藤委員）
12 月 1 日（月）	午後：尚綱学院高校、河合塾（遠藤委員長、菅原委員）
12 月 6 日（土）	午前：卒業生 5 名（遠藤委員長、加藤副委員長、関内委員）
12 月 8 日（月）	午後：仙台東高校、仙台向山高校、古川高校、聖ウルスラ学院英智高校（遠藤委員長、関内委員）
12 月 10 日（水）	午後：宮城学院高校、仙台三桜高校、代々木ゼミナール（遠藤委員長、加藤副委員長）

- ・ 本日の流れを説明する。本日のインタビュー調査は2名1チームとして、1時間半～2時間、休憩を挟みつつ行っていただく。メモ用紙（資料4）を必要に応じて使用していただきたい。
- ・ 本日のインタビュー調査の方向性については、遠藤委員長と齋藤点検・評価委員長が協議を行った上で、今後、社会的評価を高めていくために本学が何をすれば良いのか、方策を見つけ出すような内容にしたい。

卒業生は、①東北学院大学の教育についての要望、良い点、改善を要する点、②東北学院大学の教育以外の事項についての要望、良い点、改善を要する点、③東北学院大学の社会的評価の向上に向けた意見・提案についてを、高校教員及び予備校関係者は、①東北学院大学を「どう評価しているか」や「どう指導しているか」、②東北学院大学の「魅力なところ」や「改善が望まれるところ」、③東北学院大学の社会的評価の向上に向けた意見・提案について、自由に質疑応答を行っていただきたい。

- ・ 集団でのインタビューとなるため、卒業生の就職先の話題の際は注意していただきたい。
- ・ 菅原委員：対象者が多いため、記録係を事務局にお願いしたい。

◎事務局3名が交代で入室し、ボイスレコーダーで録音を行うこととする。

2. インタビュー調査

- (1) インタビュー調査（各日実施）
- (2) 今後の評価の流れについて

- ・ 事務局：今後の進め方について説明する。今回のインタビュー調査結果をもとに、外部評価委員会で『外部評価報告書』を作成していただく。

委員の方々には、本日のインタビュー調査の結果についてそれぞれ取りまとめていただき、報告記入シート作成要領（資料5）に沿って、報告記入シート（資料6【卒業生用】、【高校教員・予備校関係者】）大学事務局にご提出いただきたい。

それを大学事務局でさらに取りまとめ、外部評価委員長及び副委員長を中心に報告書のたたき台を作成する。なお、記入シートの電子データを希望する場合は、事務局まで連絡してほしい。

おおよそのスケジュールとしては、年内中に委員の方々から意見を提供してもらい、1～2月頃に報告書を完成させ、2月末～3月に第3回委員会を開催し、大学に提出するという流れを考えている。

以上

平成 26 年度

東北学院大学外部評価報告書

発行日	平成 27(2015)年 3 月 20 日
編集・発行	東北学院大学外部評価委員会
問い合わせ先	東北学院大学外部評価委員会事務局 (東北学院大学 学長室事務課) 〒980-8511 仙台市青葉区土樋 1-3-1 TEL. 022-264-6424 FAX. 022-264-6364 E-Mail ck@staff.tohoku-gakuin.ac.jp